碧巖錄三十五則に於けるグンデルト教授の疑義に就いて

平田高士

一

數多くの禪錄の外國語飜譯書のうち最も原典に忠實な飜譯書の一つとしてグンデルト教授碧巖錄獨譯を擧げたい。教授は在日三十餘年の體驗とその間度々の中國訪問により得られた支那學の知識及び梵語學を使つて確實な語學力と深い宗教哲學的思索とを併用しつゝ碧巖錄の飜譯に當つてをえられる。既にその三十二則までは完譯 Bi-YÄN-Lu (Carl Hansa Verlag 1960) と題してミュンヘンから出版ずみである。

現在も猶孜々として老軀に鞭つて飜譯に從事してをられる。東西思想のBegegnuug (出會) が盛んな現在兩者出會いの接點としてその飜譯を讀むのも極めて興味深いことであろう。因みに飜譯碧巖錄の體裁順序を見るに先づ㈠垂示 Hinweis ㈡本則 Das Beispiel ㈢下語 Zwischenbemerkungen zum Beispiel ㈣本則評唱 Erläuterung des Beispiels ㈤頌 Gesang ㈥頌の下語 Zwischenbemerkungen zum Gesang ㈦頌の評唱 Erläuterung des Gesangs の各項にわたつて碧巖の本文を逐語的に飜譯している。次に㈧テキストの解說 (Erklärungen zum Text) に入つて本則に登場する佛菩薩祖師方の細かい解說をする。支那僧名は中國語と日本語例えば無着はWu-dscho (japanisch Mu-jaku) としその次にDas Wort bedeutet "Ohne Haften" 無著と云う漢字の意味を譯する等である。而して最後に「本文の理解」Zum Verständniss des Beispiels と云う順序で一則を完譯する。また個々の禪語の譯も仲々苦勞されてをり一、二を拾つて見ると左の如くである。例えば「公案」は Das öffentliche Aushang となつてをり衲僧は Kuttenmönch である。Kutten はやはり粗末な僧服を意味している。動詞になつてくると仲仲適譯を見つけることが難しいらしく例えば「擬議する」はStottern「一撥を與う」は einen Stoß versetzen 等となつている。後日稿を改めてまた譯語を紹介することにしよう。

二

ところでこのようにして飜譯されている碧巖三十五則「文殊前三々後三々」の則に對して教授が一つの疑問を投げかけてをられる。こゝにそれを紹介して大方の識者達の御指示を仰ぐわけであるがそれに先立つて本則と頌の譯文を掲げて見よう。本文と比較照應し乍ら味讀していたゞきたい。

擧文殊問無著近離什麼處
Wir legen vor: Manjushrī fragte Wu-dscho: Von wo kommst du neuerdings her?
無著云南方
Wu-dscho antwortete: Vom Süden
殊云南方佛法如何住持
Manjushrī fragte: Wie hält sich denn im Süden das Gesetz des Buddhas?
著云末法比丘少奉戒律
Wu-dscho erwiederte: Bei den Mönchen dieser Endzeit tun nur wenige der Ordensdisziplin und ihren Regeln Ehre an.
殊云多少衆
Manjushrī fragte: Wieviele sind es denn in eurer Bruderschaft?
著云或三百或五百
Wu-dscho erwiederte: Vielleicht dreihundert, vielleicht auch fünfhundert.
無著問文殊此間如何住持
Wu-dscho fragte Manjushrī: Wie hält sich das Gesetz des Buddhas hier?
殊云凡聖同居龍蛇混雜
Manjushrī sagte: Hier wohnen Weltliche und Heilige zusammen, Drachen und Schlangen in bunter Mischung durcheinander.
著云多少衆
Wieviele sind es in der Bruderschaft?
殊云前三々後三々
Manjushrī antwortete: Vorne san und san; hinten san und san

この譯文中でグンデルト氏が問題にするのは最後の譯文の傍線の箇所である。則ち「三」を數字の drei とか dreimal とかに譯さずそのまゝに San と音譯してゐるところである。これは實はグンデルト教授の意圖あつての譯出なのである。此の「三々」と數字を二つ重ねたところは色々な意味があると思われる。無著が五臺山を訪れて文殊に出會うと云うこの物語りでは無著が今時佛道修行者で眞に戒律を奉ずるものがまことに少なくなつたと末世の比丘に大いに奮慨して終いに文殊との問答となつてくるのである。而して物語りの中心は

「三百・五百」の比丘中わづかの眞實修行者しかゐないことを無著が文殊に訴えている。次に憧れの地五臺山での修行僧の狀態とその人數を無著が尋ねることになる。それに對して文殊は「凡聖同居龍蛇混雜」と答え「前三々後三々」と答えたのである。かく考えるとこの「三」はやはり「多少衆」の間に對する答えであるから數字の「三」と理解せざるを得ない。「三三」は修行者の數を示した語と表面上は理解される。從來の教家の解釋も凡てこの「三」を數字の「三」としてそれから種々に「前三々後三々」の言句を解釋するようである。

總じてこの句に對する說を見ると㈠「前三々後三々」で前後と云つた如き字句を無意味として只、この「三」は無限無量を示す數字であると云われたり、㈡「前三々後三々」で前も「三々」後も三々と云うところから前後彼此全く相同じき法性界を示す語であるとかに說かれてゐる。そのようなところから殊に提唱本などには「此の數が知りたくば大空の星の數を數えてこい」とか天桂禪師の如くに「前から讀んでも後から讀んでも同じこと」など、說いている。いづれも「三」を數字の「三」と見て更にその上に立つて無理に他の意味を持たせようとしてゐるようである。然し根本的に「三」を數字の「三」と見ていることに變りはない。而してこれら一連の解釋がドイツ人としてのグンデルト氏にはどうしてもスッキリしないのである。やはり「三」が數であるならばそれらの世界と全く離れた解釋を「三」に對して下すことは出來ないと考えるわけである。「三々」とは「九十日なり」の意も在るが此れはこゝでは通用しない意味であろう。然らばその「三」は如何に扱わる可きであろうか。グンデルト氏によれば「文殊の答は明らかに一つの謎の言葉の相を持つていて、そのより深い意味は未悟のものには祕められたまゝであらねばならない。そこで此の謎の言葉（Rätselwort）が古來佛教では重要な役割を占めていることが想起される」と述べられてゐる。而して謎の言葉（Rätselwort）とは「眞言」Mantra（chinesisch dschën-yän, japanisch shin-gon）なりと云われる。則ちグンデルト氏によれば「三々」の「三」とは數字の「三」ではなくて一種の陀羅尼ではなかろうかと云うのである。則ちsa（薩）字眞言である。sa（薩）字はまた支那音譯に「娑」「薩」「颯」「拶」「三」「散」「參」「縒」等が當てられている。この中に「三」が存在するわけである。而してグンデルト氏の推測ではこの「前三々」と云われる「三」は「薩」字眞言ではなかろうかと云うのである。薩または娑字は㈠諦（Satya）㈡一切智（Sarva-jña）㈢聲（śabda）㈣平等（Samaya）㈤喜（Śata）等の眞言である。

三

そこで娑字に就いて調べてみると「娑[2]字門一切法一切諦不可得故」また「娑[3]字門一切諸法一切諦不可得故者梵云薩跢也。此飜爲諦。謂如諸法眞相而知不倒不謬云々悉是不思議法異亦空亦假亦中不實不妄無定相可示。故云諦不可得」とあり「娑[4]字門入諸法時不可得故。諸法時來轉故」また「說[5]娑字出覺一切智聲」など、各經典中に說かれる。

それは眞言を唱えることによつて眞實諦に得入すると云われる娑字眞言であり、「前三々後三々」と云う文殊の謎に充ちた「三」はまさしくこの娑字眞言ではなからうかと考えるわけである。而して此の眞言陀羅尼が支那禪思想中に一つの役割を演じていたことは確かであり、グンデルト氏は碧巖七則慧超問佛の則に於ける「汝是慧超」もやはり陀羅尼思想の影響であろうとしている。かくして「前三々」の三は數字のみではなくて更にその奥に「薩字」としての「三」と云うことになつて來た。そこでは既に數字の「三」ではなくて眞實諦としての「三」字である。「前[6]も後も上も下も四維も一切であり、一切が一眞實諦である。「前三々後三々。」もはやこれ以上云う必要はない」と云われてゐる。そのことは次の雪竇の頌を見ても確信し得るとグンデルト氏は云う。則ち「清涼多少衆」ぞと眞實修行者の人數を問うた無著に對する文殊の答「前三々後三々」の「三」は一應表面的には數を表わしている。然しグンデルト氏によればそれはあくまで表面上の意味であつて更にそこにより深い意味のあることを知らなければならない。それは凡ゆる多とか少とかを絕して薩字の世界眞實諦を直示する「三」である。故に前薩㊂々後薩㊂々、Tjian San san, hou san san 前後左右彼此ともに san san である。人は「三」字に此の意味を知りその世界に得入せねばならない。ところが無著にはその文殊の深い意味が理解出來なかつた。故に雪竇が「堪[7]笑清涼多少衆」と無著を批判したのであると云うのがグンデルト氏の意見である。無著の愚かさまことに笑うに堪えたり、「多少衆」の答が分つていないと云うのであろう。以上が大體グンデルト教授疑義の要旨である。果して「三」字が眞言「薩」字であり得るか否か大方諸賢の御指示を仰ぎたい。支那禪佛教に於いて眞言思想があつたことは勿論誰しも否定出來ないであろう。また文殊の答「凡聖同居龍蛇混雜」と云う言句も表面上は眞箇戒を奉じた修行僧も贋僧も英靈の漢も愚劣の僧も雜居していると云う意味であろうが、その奥には更に「凡聖龍蛇眞僞善惡」一如底の眞諦そのものを違つた表現法で直示している。その後を受けて出て來る「前三々後三々」の答もまた眞諦直示の言葉と見ることは出來るであろう。また文殊と無著を配した一連のこの物語りの中心はやはり種々世間にわたる問題を通して眞諦直示と云うことに物語り作者の意圖がある。さすればグンデルト氏の云う如く「前三々後三々」の「三々」はこの言葉

を通して薩字眞言のことを云つているのかも知れない。日本佛教學者の御意見を聞きたいと云うのがグンデルト教授の希望である。

1 Manjushri's Antwort trägt deutlich die Merkmale eines Rätselwortes, dessen tieferer Sinn dem Uneingeweihten verborgen bleiben muß. Nun ist daran zu erinnern, daß Rätselworte in Buddhismus von jeher eine wichtige Rolle spielen.

2 瑜伽金剛頂經釋字品　大正藏經十八卷 338 頁

3 大毘盧遮那成佛經疏卷七、大正藏經三十九卷 654 頁

4 大品般若經第五　大正藏經八卷 256 頁

5 文殊師利問經字母品　大正藏經十四卷 498 頁

6 Vorne, hinten, oben, unten, ringsumher ist alles, alles eine einzige Wahrheit. "Vorne san und san, hinten san und san". Mehr bedarf es nicht.

7 Lachhaft, in der "Reinen Kühlen" fragen: Wieviel sind's?

寄稿されなかつた諸氏の發表題目（二）

范縝の神滅論の背景	牧田諦亮
吉藏の中論疏引用の諸經論について	泰本　融
「大盆淨土經」と「淨土盂蘭盆經」	岡部和雄
天台智顗の佛身觀	安藤俊雄
妙見菩薩と眞武大帝	吉岡義豐
傳教大師の菩薩思想	鹽入亮忠
天台沙門源空について	福井康順
法然の思想に關する美學的試論	梅庭昭寛
親鸞と現世利益	松野純孝
歎異鈔における問題點	幸城勇猛
念佛と農耕儀禮	坪井俊映
空海から道元へ	玉城康四郎
道元・日蓮における法華經觀の對比	田村芳朗
普化宗について	光地英學
興禪護國論と正法眼藏弁道話	黑丸寛之

（二七〇頁に續く）